



Title	授与動詞の体系と変化に関する方言対照研究
Author(s)	日高, 水穂
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40121
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	ひだかみずほ
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第12899号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	授与動詞の体系と変化に関する方言対照研究
論文審査委員	(主査) 教授 真田 信治
	(副査) 助教授 仁田 義雄 教授 土岐 哲 助教授 渋谷 勝己

論文内容の要旨

本論文が研究対象とするのは、日本語における「やる」と「くれる」というダイクティックな対立を成す授与動詞の語彙体系である。話し手を基準にした「動き」の方向性を「人称方向性」と呼び、話し手から遠ざかる方向の授与を「遠心的方向」の授与、話し手へ向かってくる方向の授与を「求心的方向」の授与と呼ぶとすれば、この両方向に関しての語彙の対立があることが、現代日本標準語の授与動詞の特徴であるといえる。

「やる」と「くれる」の対立を「やる／くれる」のように表すと、この「やる／くれる」対立の存在は、日本語の史的変遷の中でも不变のものというわけではなく、また、全国的に一律のものというわけでもない。歴史的には、中古以前には、「くれる(くる)」が両方向の授与で用いられていたものと考えられ、一方、地域的には、現在でもクレルを両方向の授与に用いる方言が多く存在する。中央語が「くれる／くれる」から「やる／くれる」へ、という史的変遷を辿ったと推定されるのに対して、授与動詞体系の全国的な分布状況は、「クレル／クレル」が「ヤル／クレル」を間に挟んで周囲的に分布するという、中央語の史的変遷を裏付けるものである。こうした、かつての中央語で起こったと考えられる授与動詞の表現体系の変化のメカニズムを、現代の「クレル／クレル」使用方言を見ることによって検証していくことが、本論文の第一の課題である。

なお、この旧体系「クレル／クレル」使用地域と新体系「ヤル／クレル」使用地域の接触地域には、中間体系とも言える混在的な授与動詞体系が見受けられる。その授与動詞中間体系には、地域的な差異がさまざまに認められる。こうした授与動詞中間体系を含む授与動詞の体系化の地域差が、どのような過程を経て成立したものであるかを検証することが、本論文の第二の課題である。

また、授与動詞移行体系においてクレルの用法が変化していく過程には、言語環境上の諸条件とかかわる規則的な変化傾向が認められる。さらにそうした傾向は、方言によって現象を異にするわけであるが、そうした、現在観察される言語変化の地域差を、伝統的方言体系の地域差によって説明することが、本論文の第三の課題である。

本論文は、全体を3部14章に分けて記述を進めている。

第1部では、各地方言の体系記述のための枠組みと観点を提示する。現代日本語の授受動詞「やる」「あげる」「さしあげる」「くれる」「くださる」「もらう」「いただく」に共通している統語的・意味的特徴を明らかにし、「やる／くれる」対立の持つ制約の性質を「人称的的方向性」という観点から記述する。さらに、かつての中央語の文献資料を

扱った諸研究により、授受表現と関連表現の変遷、[やる／くれる] 対立の成立過程についてまとめている。

まず、第1章では、現代日本標準語の授受動詞の統語的・意味的特徴を明らかにし、授与動詞の統語的・意味的規定を示している。第2章では、授与動詞「やる」「くれる」の持つダイクティックな性質について、他の話者中心的な構文と比較しながら検討している。「やる／くれる」対立の持つ性質は、話し手を基準にした「動き」の方向性、すなわち「人称的方向性」という観点から捉えられるものであるとする。第3章では、授受動詞による表現体系をめぐる史的変遷を取り上げている。かつての中央語の文献資料を扱った諸研究により、授受表現と関連表現の変遷、「やる／くれる」対立の成立過程についてまとめ、方言の授与動詞体系を見る際の、歴史的な背景を示している。

第2部では、授与動詞と関連表現の全国的な方言状況を把握するために、既存の方言資料を用いた分析を試みている。第2部で扱う資料は、授与動詞の全国分布図、各種の方言談話資料、方言辞典等である。授与動詞として用いられる形式の全国的な分布状況と、各形式の意味用法の範囲を明らかにしている。

第4章では、授受表現（授受補助動詞表現）の使用についての地域的な特徴を検討している。第5章では、授与動詞として使用される形式の全国分布を把握し、さらにそれらが人称的方向性による対立を持つか否かといった体系性の面から、現在の授与動詞の地理的分布の成立について整理している。第6・7章では、各地の主要な授与動詞について、方言談話の文字化資料に現れた用例をもとに、その意味用法の範囲を検討し、全国的な分布状況を示している。

第3部が本論文の中心的な内容である。第3部では、第1部で示した授与動詞の記述の枠組みに基づき、また第2部で示した全国方言の分布状況を踏まえて、各地方言の記述を行っている。方言授与動詞を対照させるために、これまで論者が中心的に調査を実施してきた地域は、中部地方と九州地方である。本論文では、その中から、対照に堪え得るだけの特徴を備えた方言として、北陸方言域の方言、東部方言域の方言、九州中部・南部域の方言を複数取り上げて対照を試みている。北陸方言と東部方言は、授与動詞移行体系にみられる現象に相違点が認められ、また、東日本方言と九州方言には、すでに成立している授与動詞中間体系に地域差が認められる。こうした授与動詞の体系化、体系変化の地域差を、それぞれの方言が伝統的に持つ言語特徴の相違として説明している。

第8章から第10章までは、北陸方言が扱われている。第11章、第12章では、東部方言が扱われている。いずれも、伝統的に[クレル／クレル] 使用地域である方言であるが、北陸方言域の五箇山・白川郷・内浦町方言と東部方言域の信州新町・伊豆諸島（大島・利島・三宅島）方言は、語彙体系の上でも各形式の意味用法の上でも異なる点が多く、さらに授与動詞の方言用法の衰退的変化過程においても異なる傾向が見られる。ここでは、現在の動態として観察される授与動詞の体系変化の方言差を、伝統的方言体系の中での授与動詞体系の方言差によって説明する試みを示している。一方、第13章では、九州方言が扱われている。九州中部域では、かつて[クレル／クレル] と[ヤル／クレル] の接触から[ヤル／ヤル] が発生したものと考えられるが、ここでは[クレル／クレル] 使用地域である九州南部方言と[ヤル／ヤル] 使用地域である九州中部方言の基本的な授与動詞の意味・用法を記述、対照させることによって、こうした体系変化の発生のメカニズムを検討している。最後に第14章では、人称的方向性を区別する表現体系の東西方言差という観点から、以上の各章で見てきた諸現象を対照させている。

なお、全国方言を見渡す「鳥瞰的」な観点と、ある特定方言の網羅的な体系記述といった「虫瞰的」な観点とを併せ持った方言研究の試みを、同一の枠組みによって行うことが、本論文の目標としたところである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、授与動詞の語彙体系を対象に、各地方言の対照を行ったものである。

まず、既存の方言資料の分析により、授与動詞と関連表現の全国的な分布状況を検討して、次のような地域区分を画定している。

「中央部」地域：西部方言域

「周辺部」地域：東部方言域・北陸方言域・九州方言域

授与動詞使用の「中央部」地域とは、[ヤル／クレル] 使用地域であり、「周辺部」地域とは、[クレル／クレル] 使用地域である。申請者の詳細な調査によって、「中央部」地域は授受動詞表現の使用度（定着度）が比較的高く、

「周辺部」地域は授受動詞表現の使用度が比較的低いことが明らかになった。また、「周辺部」地域にもヤルの使用は認められるが、それは「対象物の移動」に意味の中心があるので、「所有権の移動」を表す授与動詞としては用いられないことを明らかにした。

かつての中央語は〔くれる／くれる〕から〔やる／くれる〕へ、という史的変遷を経たものと推定されるが、本論文では、こうした授与動詞の表現体系の変遷が、授与行為の言語的表明に際しての語用論的な配慮によって生じたものと分析した。なお、これは、現在の〔クレル／クレル〕使用方言においても確認されるものであるとする。すなわち、クレルの表す授与は本来無償の所有権移動を意味し、受け手の恩恵意識の存在、成立を前提としたものとなるのであるが、こうした付隨的意味を持つことにより、受け手の抱く心理的負担への配慮から、特に遠心的方向の授与を表す場合のクレルの使用を控えるべき場面が生じることがある。その場合、従来所有権移動の含意を持たず、対象物の移動に意味の中心があるヤルを、授与の婉曲的な表現として用いることが起こる。クレルの遠心的方向用法は、受け手への親愛表現として機能し得る反面、場合によっては尊大な表現とも受け取られかねない。標準語的な〔やる／くれる〕対立は、「くれる」の遠心的方向用法に語用論的な制約が生じ、こうした文脈で「やる」を代用することによって生じたものと考えることができる、とするわけである。

ところで、伝統的に〔クレル／クレル〕を用いる方言では、現在、クレルの遠心的方向用法が、構文的に段階を追って狭まっていく現象が観察されるが、クレルの移行用法のうち、五箇山・白川郷・内浦町方言では、「提供文残存型」が優勢な体系変化の傾向を示し、信州新町・伊豆諸島（特に三宅島）方言では、「本動詞残存型」が優勢な体系変化の傾向を示していた。こうした体系変化の地域差は、伝統的方言の表現体系の性質の異なりを反映したものであると考えられる、とする。すなわち、信州新町・伊豆諸島方言で「本動詞残存型」優勢傾向が生じるのは、伝統的方言体系の中に〔ヤル／ヨコス〕対立を持つことにより、ヤルが本動詞用法で授与動詞化する以前に、ヨコスに対応する意味のヤルに補助動詞用法が発生し、クレルの用法と競合するようになったためであるとするわけである。東部方言では、複合授与動詞の発達などに見られるように、人称的方向性を区別する表現体系の枠組みは存在しており、補助動詞用法では本動詞用法に先んじてヤルとクレルが人称的方向性明示機能において対立するという独自の体系化をしている。一方、五箇山・白川郷・内浦町方言では〔ヤル／ヨコス〕対立を持たず、イクスが人称的方向性に関して中立的に用いられる。ヤルの使用は、非人格的存在を受け手とする用法に制限されており、本動詞用法と補助動詞用法が非並行的に使用される状況にはなかったのである。これらの北陸方言においては、伝統的方言体系の中に人称的方向性を区別する表現体系の枠組みが存在しなかったものと考えられ、現在、標準語的な表現体系を取り入れる過程において「提供文残存型」優勢傾向が生じているものと考えられる、とするのである。

こうした授与動詞の体系変化は、九州地方の〔クレル／クレル〕使用地域には、現段階の調査では観察されなかつたが、九州地方で注目されるのは、中部域の方言で、求心的方向用法を持つヤルの授与動詞としての使用が認められる点である。〔クレル／クレル〕使用方言と〔ヤル／クレル〕使用方言の接触地域には、さまざまな授与動詞中間体系が認められるが、〔ヤル／ヤル〕という求心的方向用法を持つヤルの使用は、東日本にはまとまつて認められず、九州地方に特徴的な授与動詞の体系化であると言える。これは、九州方言が、所有権を伴わない二者間の距離を前提とした物、人の移動を表す動詞表現として伝統的に〔ヤル／ヤル〕を持っており、この意味のヤルが〔ヤル／クレル〕体系と接触することにより授与動詞化したため生じたものと考えられる、とするのである。

このように、現在までに成立している授与動詞中間体系の方言差も、伝統的方言体系の授与動詞とその関連表現の方言差によって説明されるものであることが本論文によって解明されたわけである。なお、こうした授与動詞中間体系の方言差、現在の動態として観察される体系変化の方言差は、人称的方向性を区別する表現体系一般の方言差として捉えることが可能である。授与動詞体系以外に、「来る」方言用法の分布状況、準遠心性動詞の求心的方向用法の許容度という観点から現象を見ると、西部域の「周辺部」地域は、人称的方向性を区別する表現体系の枠組みが比較的未分化であるのに対して、東部域の「周辺部」地域は、人称的方向性を区別する表現体系の枠組み自体は確立しているものと考えられる。

本論文は、この分野での研究に強いインパクトを与える前衛的な内容を持ったものと評価することができる。ただし、残された課題も多い。特に、中央語の変遷に関しては、すべて先行の諸研究に頼っており、今後に課題を持ち越すことになった。また、扱った方言に関して偏りがあることも否めない。九州方言については、北部域の方言も含め、

さらに検討する必要があろう。東部方言として扱うべき東北方言にまったく触れられていないことも残念である。しかし、これらの点は現時点においては望蜀というべきものであって、けっして本論文の価値を損ねるものではない。

以上のように、本論文は、今後に予想される研究の展開に新しい指針を与えるものであり、博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。